働き方についての二つの提案

橋口 昌治 氏

ユースシンポジウム2014の第２部参加型セミナー「若者が語る　私の働きマインド」は,「今の社会状況にも触れながら,私としていかに折り合いをつけながら“働く”を選ぶか，どのように生きていくか」がテーマでした。当日は，参加者が話した内容を踏まえ，日本の教育と雇用（そして両者をつなぐ「就職」）のあり方がもたらす日本独特の職業選択の難しさ，働きづらさなどについて話をしました。ここでは当日あまり話せなかったこと，つまり今の社会においていかに働くかということに関する二つの提案を書きたいと思います。

一つ目は，働くということは自分の労働力を商品として売ることなので，価格の交渉をしましょうということです。当たり前だと思われるかもしれませんが，日本の職場ではほとんどできていないと思います。むしろ「やりたいこと」や「人間的な成長」といった言葉によって働くことが経済的な観点を度外視して語られ，「契約にもとづいて労働力を売っている」といった“割り切った”考え方が許されないような雰囲気ができあがっています。なので，もっと働くことを経済の問題として捉える視点を持つことが重要です。簡単に言うと，ケチになって「自分の労働力を１円でも安く売るものか」と思うことです。この場合，賃金額を社長と交渉することだけでなく，なるべく早く帰る，頑張りすぎないといったこともイメージしています。もちろんそれで気を張るのも疲れますし，そういうことをするとかえって疲れる職場になってしまっています。その背景には，日本社会では，交渉によって賃金を上げるよりも，たくさん働いて収入を増やすことを良しとしてきたことがあります。また労働者は賃金が下がることに残業代を増やすことで対応してきました。しかし供給が増えれば商品である労働力の価格は下がるわけで，これでは薄利多売の悪循環に陥ってしまいます。企業もコスト削減によって利益を出すビジネスモデルを採用し,その結果，日本の生産性は他国に比べて低い状態にあります。そして賃金の低下は需要不足を生み経済の停滞をもたらしてきたため，今や消費拡大を望む政府が労働組合に賃上げ要求をするように働きかけるまでになりました。だからこれからは，日本経済のことを考えても,労働ではなく運動（交渉）によって賃金を上げていくことが求められていると言えます。

しかし日本の職場では，労働力をどのように売るか，つまり働き方の規制がほとんどできていません。その結果,職場は何でもありの無法地帯になっています。長時間労働や賃金未払いは言うまでもなく，パワハラ・セクハラ…職場以外で行えば犯罪になることも「職場では仕方がない」，そのような状況になっています。そこで自分たちの働き方を少しでも自分たちで決められる状態を作り，働き方を規制していくことが必要になってきます。それが二つ目の提案につながります。

二つ目の提案は，職場における発言権を獲得し，自分たちの働き方について決められる範囲を広げていきましょうということです。職場は，自分や家族の人生のかかった大事な場であり，１日の大半を過ごす場所でもあります。しかし多くの人は，そのような大事な場所のことを決めることに参加できず，言われるがままの状態です。生活の手段を奪う解雇さえも，社長の一存で決まってしまうことがあります(もちろん不当な解雇は，裁判をしたりユニオンに入って交渉をしたりすれば撤回させることができます)。労働契約は本来対等なもの同士で結ばれるべきものですが，日本の職場では雇用関係が支配・被支配の関係になってしまっています。使用者や上司が絶対という職場が少なくありません。そこに「お客様は神様です」という変な価値観が加わり，働くことは他人に従属することという考えが当たり前のようになってしまっています。１日の多く，人生の多くを他人に奪われて過ごすことが人々にもたらす無力感は大変なものです。労働運動をして職場で発言権を確保することは，このような無力感をやわらげるものだと言えます。

また1990年代以降，非正規労働者が増え貧困が拡大しましたが，労働組合の多くが大企業の正社員で構成されていることや小選挙区制の影響もあり，非正規労働者や中小企業労働者が生活の不安や不満を訴える回路は非常に限られています。そのことがもたらす無力感も大きいです。いかに折り合いをつけるかという今回のセミナーの問題意識も，そのような社会状況に対するリアルな認識から生まれたのだと思います。

「人間らしく働きたい」「普通に働きたい」「しっかり休みをとって自分の時間を楽しみたい」そういった当たり前の願いさえ実現できない職場が多いなかで，いかに働き，生きるのかは若者に限らず多くの人々にとって深刻な悩みになっています。それに対して，「賃金交渉をしましょう」「職場における発言権を獲得しましょう」と提案をすることには,「それができれば苦労しないよ」という反発が返ってきそうです。しかし，そのような発想や文化が失われてしまうことほど絶望的なことはないと考え，敢えて書かせていただきました。今回の提案を実践することは大変で面倒くさいですが，ある種あきらめてやらざるをえない時代になったと思います。それも一つの折り合いのつけ方ではないでしょうか。

はしぐち しょうじ
橋口 昌治 氏
立命館大学生存学研究センター客員研究員として，関西非正規等労働組合・ユニオンぼちぼち（副執行委員長）に所属しながら，多様な働き方が可能な社会を目指して研究・活動中。